

## 台湾 東海大学図書館見学記

信 喜 氷 確

昨年（昭和四四年）七月下旬より八月初旬にかけて中華民国を旅行した際、わずかながら日数をさいて臨時首都台北市と中部の台中市にある大学図書館を見学した。以下、二、三の見聞に加えて主に東海（Tunghai）大学図書館について述べたい。

中華民國五八年（昭和四四年）四月現在、台湾省だけで総合大学が国立四校、省立二校、そして私立が一校あり、そのほか図書館が発達している単科大学、専門学校として中国文化学院、神学専科学校、淡江文理学院などがあげられ、各校とも一〇万冊以上の蔵書を有している。とりわけ国立台湾大学は七五万冊以上の蔵書を保有し、台湾省における大学図書館の中心的地位を占めているといっていだらう。

一方、図書館員教育、養成も大学中心に行なわれており、国立台湾大学、国立台湾師範大学、国立政治大学、さらに私立淡江文理学院、そして後述する私立東海大学などが図書館課程を設置し、教

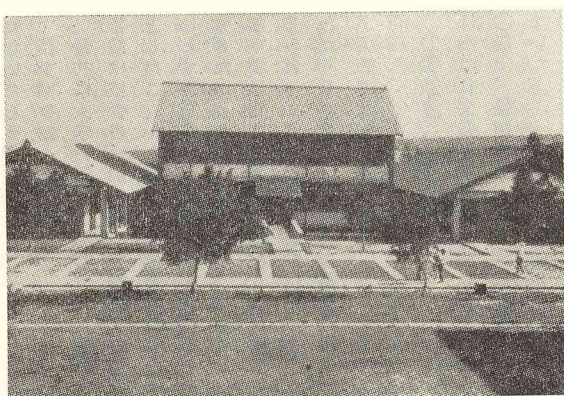
育部（文部省）でも講習会を行なっている。

わたくしが訪問した時はおりあしく夏期休暇中で、国立台湾大学、国立台湾師範大学とも係員が不在で、ただ館内をひとまわりしただけであったが、両校ともこの国を代表するにふさわしい外観を呈し、設備も整っているように感じられた。大学構内は、夏期休暇中にもかかわらず、学生の姿が見うけられ、わたくしからの簡単な英語の質問にも快く応じてくれたが、彼らには、ひとしくエリートらしい品格と態度がそなわっていた。これは東海大学やその他の大学の学生も同じで、日本の学生と少し違うようであった。

さらに大学図書館のみならず、一般の市民図書館や学校図書館等の見学も試みようとしたが、手続きが非常にむずかしく、日数、手数等を要するので、やむをえず中止したが、一般的に市民図書館は蔵書数、図書館数、館員数とも非常に不足しており、「特に都市に集中しすぎて

おり、全島をしめる町村にはまだ奉仕が及ばず、各県市立の図書館々舎は、少数を除き荒廃しており、人口一人あたり〇・一冊では実際の需要にこたえるすべもない」(日本図書館協会刊「世界の図書館」)

東海大学図書館全景



より)。現在のこの国の状況のきびしさの一端がうかがわれる。

### 東海大学図書館

東海大学はキリスト教連合董事会、東海董事会という二つのキリスト教団体によって、一九五五年設立され、台湾省中部の台中市の郊外、大度山の田園丘陵地帯に位置し、三四五エーカーという広い敷地を持っている。校門を通りぬけても建物は見あたらず、ゆるやかな丘陵と林の中を道が一本通っているだけで、夏期休暇中であつたことも加えて学生の姿はまったく見かけず、門から十分ほど歩いてやっと本部の建物へ到着する。本部といっても、その大きさは本学の第一学生会館ほどのもの。この本部のすぐ裏手に図書館がある。都会の雑沓から離れた理想的な教育環境にあるといつてよいだろう。

教育方針がキリスト教的精神によつていえるのは、その設立団体からして当然と

いえるだろうが、特筆すべきことは校務全般にわたり、校務から雑用に至るまで学生参加が行なわれ、大学自治のある種のモデルが実際に活動していることである。むしろわが国とは事情が相違するところも考えあわせねばならないが……。

現在、三学部を擁し、その構成は、左のとおりである。

#### 文学院(部)

中国文学系(科)、外国文学系(科)

歴史学系(科)、政治学系(科)、経済学系(科)、社会学系(科)。

#### 理学院(部)

物理学系(科)、化学系(科)、生物

学系(科)。

#### 工学院(部)

化学工程学系(科)、建築工程学系

(科)、土木工程学系(科)。

以上社会、人文、自然、応用の各科学を統轄する総合大学で、学生総数一二〇〇余名、全寮寄宿制、その他は日本の大学と大きな相違はないが、政治問題に対してたいへんデリケートなのはいたしか

たないだろう。

話を図書館へ進めよう。

最初に大学の業務が開始された時、図書館は校舎の一部をさいて書庫、読書室としたことから始まり、館員も館長を含めわずか三名で、総図書数も三万余冊にすぎなかったそうであるが、学生数の増加や各学院(部)の多様化した研究に応じられるように年々図書数は増加され、わたくしが見学した昨年(昭和四四年)八月五日現在、中文古籍(漢文古書)類が三八、八四八冊、中文書籍(漢文書)三〇、六六九冊、英文書籍三八、一〇〇冊、ほかに日文书籍(日本語書)が約二、二〇〇冊で、総図書数一十一万冊余と揭示されていた。

## 1 組織

「本館編制上直属於大学校長、設館長一人、由校長聘任。」制度上以上のごとく定められており、一般職員は助理(副)館長をはじめとし一二名で、学生の職務参加も円滑的に行なわれているようで、

現在には特に問題はないとのことであった。職員は組織上、館長の下で採訪編目組(図書、古籍、雑誌類の購入、分類、登録、目録作成および製本が業務)と流通参考組(各類書籍の閲覧、レファレンスが業務)に分かれ、前者はさらに中文編目股、西文編目股、期刊股、古籍特蔵股の四係に細分され、後者も流通股と参考股の二係に分けられている。しかし実際の業務の流れは夏期休暇中で停止しており、見学できなかったのが残念であった。このほか校長の直属諮問機関として図書館学報編さん委員会と図書委員会があり、後者は図書館の政策と予算を決定する重要な役割を果たす。

## 2 施設

大きさは早大図書館にはとてもおおよばないが、施設はゆきとどいた設置計画によっており、職員も学生も機能的に活動できるように設計されている。一階正面玄関から入るとホールのような閲覧室があり、その中央に二階へ通ずる階段があ

り、その左手奥が期刊(雑誌)室で三九〇種以上のさまざまな雑誌がおいである。日本語雑誌も文学、理工学関係のものが少数配架され、目をひいた。座席総数は二三〇席で閲覧室は二階にもあるが、一階閲覧室は軽い読書程度に、二階閲覧室は書庫を利用して学習研究用に使い分けられているようであった。書庫は高温、高湿度に対処するためか、一階に一部分だけを、そして二階に大部分を配架させており、台湾省内では珍しい開架書架方式を採用し、案内手引き書にも「本館自創校始、為便利教学及養成学生之榮譽感、即毅然採行完全開架制度、便讀者自由進入書庫、選択其所需書籍、此項制度在本省尚属創舉、推行以来、人人称便。至自前因開架而損失之書籍、僅占全部藏書千分之三、而圖書之流通機會則大為増加」(以下略)と高らかにその成果をうたっている。

書庫内には目録カードケース、キャレル等も配置してあり、書庫内での学習、閲覧も可能にしているが、やや照明が暗



く、配架も五、七層の単層式で外見に比べて、内部の細かな構造の貧弱さが目につかぬでもない。建物自体はコンクリート造りで各階の床は特産の大理石で堅固かつ優美である。

二階の中央、階段の踊り場に半月形の出納台があり、主に学生が館内外への貸出し業務を行なっている。その他、弁公室（事務室）が一階の奥の手にあり、増築された別棟を参考室とし、わが国と同様な参考書誌類を配架させている。

### 3 学生参加

図書館では業務への学生参加という形式を採用しているが、キリスト教奉仕活動教育計画の一環でもあり、学生は必ず参加せねばならないシステムとなっている。図書館ではその教育指導方針を「東海大学図書館工読生工作要領」として、図書の登録、分類、配架、清掃まで規定しているが、前述の図書委員会への参加はできないし、大学教育の一部でもあるのできびしい面があり「要領」に「工読

学生違反本規定屢経勧告而不改正者、除勞作考績予以注意外、並考慮取銷其在本館工作機會、情節重大者、報請校方處理。」と罰則も定めている。

### 4 分類

この図書館で最も興味を引いたのが分類であった。この国では普通、和漢書、古籍、欧文書が別々の分類法で分類される。和漢書（この国では中日文書という）はこの大学図書館では、劉国鈞氏が民国一八年（昭和四年）に著わし、最近賴永祥氏によって改訂された「中国圖書分類法」、または別名「金陵大学分類法」を採用し、古籍は「北平人文科学研究所分類法」、欧文書は「デュレイ十進分類法」をそれぞれ使用している。

「中国圖書分類法」は総表（主類）を、

- 000 總部（類）
- 100 哲学部
- 200 宗教部
- 300 自然科学部
- 400 応用科学部

- 500 社会科学部
- 600, 700 史地部
- 800 語文部
- 900 美術部

に分けているが、哲学部、社会科学部、自然科学部、そして美術部などは「日本十進分類法」と内容的に類似しているが、歴史・地理に600から799まであって、そのうち610から699までを中国の地理、歴史に充当し、「日本十進分類法」の主類500工学、600産業を「中国圖書分類法」では、これらを合併させて総表400応用科学とし、その大綱（主綱）を400 総論、410 医学、420 家事、430 農業、440 工程、450 磁冶、465 応用化学、470 製造、480 商業、490 商学と各分野から収めている。このほか、特徴あるものを拾えば、000 特蔵、010 目録学、090 羣經、160 形而上学・玄学、210 比較宗教学、290 術数・迷信、530 礼俗、670 方志、680 類史、990 遊芸、等があげられようか。

具体例をとってみよう。書架に「美國

的民主」という本が配架されており、その分類記号は、

574.521
C3003

となっている。すなわち574は、社会科学—政治—各国行政制度で、521は地理区分—アメリカ大陸—アメリカ合衆国を表わしている。その下段、Cは著者陳榮(Chen Jong)氏の姓名の音から採り、3003はこの類の入庫順番号で古い図書であることも判別できる。

大綱、主綱を見比べただけでは表面上の相違しか推量できないが、「中国図書分類法」は中国古典に関するもの全般、宗教、哲学方面にすぐれた内容を持ち、特に漢文古籍については特別の分類法を用いており、この図書館の分類に対する配慮はじゅうぶんといえよう。その「北平人文科学研究所分類法」は、その大要をAからFまでに分け、

A00 經部

B00 史部

C00 子部

D00 集部

E00 叢書部

F00 方志部

とし、たとえばわれわれにもなじみ深い春秋類は經部の六番目に分類されA06を、金石類はB17とった分類記号を与えられている。反面、工学・技術方面と欧米文学・語学方面がそのしわ寄せを受けているようにも感じられる。しかしながら中国語で書かれたそれらの図書は現今多くは出版されていないので分類上困るようなことはないとのことであつた。

ではどのように分類するか。その方法は大略においてわれわれと差はない。すなわち図書の内容で分類し、必要に応じて書名、目次、序言・導言、重要章節、参考書及び書評などを参考にするとのことであつた。

## 5 目 録

開架制度を採用し、利用者が常時書庫

に入庫し圖書を選択しているような図書館では、目録が果たす役割は開架制度のそれとは別の重要性を持つといえるだろう。ここで採用している目録規則は、欧文図書については「Aker's Simple Library Cataloging」和漢書については「国立中央図書館図書編目規則」それに排列はそれぞれ「ALA Filing Rules」「王雲五四角號碼法」とうたっているが、これらについては、私はその知識がない。

ここでは排架目録、著者目録、書名目録、分析目録、分類目録、標題(件名)目録、参考目録等においてあるが、利用者は特に欧文図書の場合、著者書名目録という著者名と書名を一本化して、アルファベット順に排列した準辞書体目録をよく利用するそうである。

## 6 学生の利用傾向

ここ数年、学生の館外借出圖書の冊数統計からみると、分類上圧倒的に多いといった類目はなく、漢文書では外国史・

外国地理と語学・文学部が比較的多くそれぞれ全借出冊数の二二％程度で、ついで社会科学部の一六％、中国地理・歴史類の一〇％と続き、キリスト教系大学でありながら宗教部門が最も少ない割合（二％）を示している。一方、欧文書では自然科学がトップで一二％、ついで文学（一一％）、社会科学（九％）でその他はほとんど同じ程度の割合でしかない。また冊数統計からみるとこ一、二年は和漢書より欧文書の方が一万冊近くも多く借り出され、利用者の語学力に感心させられた。これはわが国の大学図書館では普通、考えられないことであろう。残念なことは日本語図書がほとんど学生に利用されず、ほんのわずか教員に利用されているだけで、関心が薄く、この傾向は台湾省内の各大学でもほぼ同じとのことで、現在日本語教育が普及していないことが大きな原因であると考えられる。

わずか半日数時間たらずの見学であつ

たが、予想していた以上の収穫を得た。わが図書館の四分の一の規模に達するかどうかぐらいのコンパクトな図書館であったが、前述してきたごとく利点、特徴等を兼ね備えていたし、わたくしが理想と想っていたことさえ一部分ではあったが、すでに実施されていた。これらを補足、整理して対比すれば次のごとくであらう。

1、東海大学の座席数は約二五〇で、全学生のほぼ四分の一を満たし、試験期でも学生が利用に不自由することはないが、わが早稲田大学図書館の場合は、試験期はおろか平日でさえも利用者が不自由しているのが現状である。

2、かれは比較的近年に設計、建築されたこともあって、機能的で、館員、利用者とも利用しやすい。

3、政治上の制約から、かれは全分野にわたる図書を網羅、集成することが不可能であり、これは図書館の本来的な目的と機能を欠いているといえる。

4、業務への学生参加は、本来教育活

動の一環で、それが全学生に行なわれているとすれば、内側より透し見た全人利用者教育といえよう。これほどまでとはゆかなくとも、わが図書館で利用者教育がなされているか。

5、館外への借り出しは「東海大学図書館閲覧借書規則」をもって定め、冊数、期間を徹底させ、利用者もこれを遵守していると聞いたが、わが図書館にこのような規則が文辞化され、確実な図書借出がなされているか。

以上たいへん概略的で、目録カードや図書登録法についても触れたかったが、見学時間が少なく、私もこれといった準備をせず、場当たり的であったため成果が得られなかった。またいつかこの国を訪問する機会があれば、東海大学図書館をもう一度見学し研究を深めたい。